

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

県高体連専門委員による反省会と来年度下見

18、19の両日、県高体連の専門委員が集まり、今年度の登山部の反省会と次年度会場下見を行なった。今年度の反省事項としては、大会時の保険加入の問題が上がった。今年もこれまで同様全員加入を義務づけたが、今までとは違い直前になって全員の住所を要求され、混乱した。現実には、年間を通じて保険加入している学校も多い中、未加入の学校のみ加入義務づけとしたらどうかという意見が出された。・・・本当はすべての学校が通年型の保険に入るのが望ましいと思うのだが、現実はそのまではいかないだろう。・・・その他は特に大きな問題はなかったというのが専門委員の見解であった。

さて、次年度のコースについてである。これについては、すでに主たる山は奥秩父山塊「金峰山」ということが知らされている。金峰山では過去県大会はもちろん、北信越大会も行なわれたことがあるが、道迷い事故も起こっている。大会本部としてはそのあたりを念頭においた大会運営を心がけたいと下見を行なった。

集まった専門委員は酒井（市立長野）、青柳（上田千曲）、池迫（赤穂）、塩川（木曾青峰）、大西の5名である。これまでは、廻り目平を出発して林道を歩き金峰山をメインに周回する形で大会を行ってきた。今回は今までと少し違った形でできないだろうかとの5人が二手に分れて、一方（酒井、青柳、塩川）は金峰山方面を、方や池迫、大西の二人は小川山方面を下見した。そんなわけで、僕は小川山に登った。廻り目平にはクライミングでも、登山でもこれまで何度も訪れているのだが、小川山に登るのは初めてである。生憎の雨降りでは気分は乗らなかったが、しかし雨に濡れた紅葉は、それはそれで美しかった。廻り目平から唐沢の滝を經由して尾根に取り付き、登ること3時間で小川山に到着。木々に覆われ展望はそれほどよくないが、三角点の周囲はシャクナゲが刈り払われてちょっとした広場になっていた。金峰山小屋の情報では、小川山から八丁平へ続く稜線は、あまり整備されておらず倒木や藪漕ぎがあるとのことだが、実際歩いた限りでは、特に危険箇所もない上に、歩行困難な場所や道迷いをしそうなところもなかった。来年度はこちらも十分コースとして使えそうだと印象をもった。



石楠花に囲まれた静かな小川山山頂

詳しいコースは近々ホームページ上で公開されることになるのでそちらでご確認いただきたいが、下見後の専門委員会で検討した結果、廻り目平を出発し時計回りに金峰山小屋、金峰山、大日岩、八丁平、小川山、唐沢の滝、廻り目平というコースを設定する方向で一致した。さて、翌日はピーカンの空の下に錦に纏われた花崗岩がすっきりと聳え立つ様は本当に見栄えがした。まさに後ろ髪を引かれる思いで、山を後にした。

ボルダリング研修と京ヶ倉読図登山

19日、20日は中信安全登山技術研修交流会が行なわれた。夕刻、会場の池工に集まったのは大町高校、大町北高、池工の生徒14名と今滝・小林（大町北）、松田（県ヶ丘）、小沼（大町）藤田・大西（池工）の各顧問。池工のボルダ一壁を使いながら、高校生たちの声が夜遅くまで響いていた。翌20日は、前夜来の今滝さん、2人の池工生と小生に加え、深志の生徒2人と西牧・横山両顧問にという8人が参加。少人数の参加と相成ったが、内容は充実した。地図上に登山道の記載のない山道で、小生があらかじめ用意しておいたナビゲーション用のベアリング表と地図を使いながら、コンパスの使い方と、地形の確認を念入りに行ないながら縦走した。この山域の地形図の記載が実情と違っていることはすでにかわらばん(358号、403号参照)でも述べたところであるが、しっかりと地図を見ながら行くとその矛盾に気づくことができる。生徒にそんなことを教えるのにもいい場所である。標高もそれほど高くない割に高度感もある上、岩場あり、素晴らしい景色ありと穴場的な名山である。



稜線上から北アルプスと眼下に犀川を望む

国体長野県成年男子チーム大活躍

やや旧聞に属するが今年の国体における長野県成年男子チーム（笠原大輔・中嶋徹）の活躍は見事であった。リードで優勝、ボルダリングでも2位と気を吐いた。選手はもちろん関係された皆さんには心からおめでとうと言いたい。実際には応援にはいけなかったのだが、国体委員長の浮須さんの話によれば、実力者が集う中、僅差の接戦だったそうである。前評判も高く期待していたのだが、その通りの活躍に拍手を送りたい。なお、笠原君はその後も好調を維持。先ごろ韓国モッポで行なわれたIFSCリードカップワールドカップにおいても19位と健闘したという嬉しいニュースが飛び込んできた。



ぎふ清流国体リード決勝の壁に登る笠原(左)、中嶋の両選手

編集子のひとごと

前号で論じた旅費問題を整理するため、過去のかわらばんを繙いてみた。と、触れも触れたり、なんとその数21回。2、3、4、8、10、28、36、39、69、76、111、114、115、117、118、119、121、153、159、173、352、469号でこの問題に言及していた。我ながら吃驚であるが、これは一人私に取り組んだのではなく、山岳部顧問はもちろんそれ以外の高教組の組合員の皆さん、また高体連登山専門部長をはじめとする関係者の方々のなんとかしたいという気持ちの現れであると思う。そして現実いくつかの成果を得てきた。地道にこれまで積み上げてきたものがなし崩し的にされていくのは本当に辛いものがある。実情を調べた上で11月16日の高教組確定交渉の折にはなんとかしたいとは思っている。(大西 記)